

「チベット学」 御牧 克己

本対談は2000年11月27日の午後、京都大学文学研究科チベット学演習室に於て行われた。この対談のシリーズの目的は、博学の上山先生が普段日の当たらない研究者を尋ねてその研究内容を紹介してやることにあったのか、それとも夫々専門の異なる研究者が自らの専門に照らして上山先生の博識を引き出すことにあったのか定かではないが、本対談の結果は奇しくも後者となった。本来約3倍程の原稿量があったが、対談者の責任で適当な長さに刈り込み、上山先生にも確認して頂いた上で活字になった。最終的な脱稿が大幅に遅れて「古典学の再構築」事務局には多大の御迷惑をお掛けしたことを深くお詫びします。

●フランスのチベット学

上山 最初に、御牧（みまき）さんは仏教学をやろうと思われたのが先なんですか？チベットのほうに焦点が合ってきたのは、それからすぐなんですか、それともちょっと時間があつたんですか。

御牧 先ず仏教学が最初です。チベットをやりだしたのは大分たってからですね。最初はインド仏教のことばかりやってきましたし、私が京大の研究室に入ってきましたときは主任教授は長尾（雅人）先生、助教授に梶山（雄一）先生がおられました。最初はインドのことばかりやってみて、特に後期の論理学と認識論のものを研究していました。

上山 インドの後期というと、人名でいうとディグナーガとか、

御牧 そうです。5世紀以降のディグナーガとかダルマキールティとか。特に「経量部（きょうりょうぶ）」の思想に興味を引かれまして、例えば7世紀のダルマキールティは、外界の対象は直接には知覚されないけれど、知識の中の表象を根拠に推理されるという経量部の「外界推理の理論」といわれる説をはっきり述べていますけれど、そういう後期の理論がどこまでさかのぼれるかという点を探るのが、卒業論文の出発点でした。

上山 そうするとそれはもう語学的には大体サンスクリット一つだけでいけるんですか。

御牧 もちろんチベット語も使えたほうがいいに決っていますし、少しはかじり始めてやりましたんですけど……。

上山 それは長尾先生が、チベットのツォンカパの翻訳とか研究をやられたということと、かかわりは多少はあるんですか。

御牧 最初はありませんでしたですね。もちろん立派なご業績で参照はしてましたですけど。チベット語文法は佐藤長先生に習いましたんですけど、本当にチベット語をやりだしたのは、博士課程の2年のときにフランス（パリ）へ留学してからですね。

上山 留学先は何大学でしたかね。

御牧 パリ第3大学です。

上山 仏教学をやり始めて何年ぐらいたってますか。お幾つぐらいのことなんでしょうね。

御牧 6年ぐらいたってますね。26才の時ですね。籍はパリ第3大学のインド学のほうにあってそこで学位論文を準備していたんですけど、国際東洋語学校というのがブローニュの森のあたりにあって、そこでチベット語をもう一度、一からやりました。そのころ日本でやっていた私のチベット語というのは、書いてある文字を全部を発音する、例えば本当の発音は「トゥッパ」というところを「ブスグルブスバ」とかいうような（笑）。佐藤先生には正確な発音を教わったはずなのですがどういう訳かそういう変な仕方で行っていました。

上山 なるほど。僕らはとまどうんですがね。ここでカタカナで書いてるのとね、ローマ字で書いてるのとのずれがね（笑）。

御牧 そのころのフランスのチベット学は世界の最先端を行っていました。コレージュ・ド・フランスにはスタン先生がおられましたし、オートゼチュードの第

4 セクションにはマクドナルド夫人という先生がおられて……。

上山 その方はチベットにおられたんですか。

御牧 いいえ。時々インドへ調査には行っておられましたけれども。ただ、チベット語はものすごいけんまくでしゃべる……。後で分ってみたらそんなに上手な発音じゃないんですが、とにかくボキャブラリーが豊富で、一番最初、彼女の授業に行ったら、チベット人を相手にまくし立ててましてね。もう度肝を抜かれてしまって(笑)。

上山 それはチベット人の留学生との間で鍛えたチベット語なんですか。

御牧 そうだと思います。当時、フランスは何人もの優れたチベット人の学者を抱えていました。東洋語学校にはタクポーリンポチェという人がおられて、それからマクドナルド夫人のインフォーマントとしては、ヨンテンギャツォという学識者がいました。特に、スタン先生の助手をしていたサムテン・カルメイはボン教でしたが、これはヨーロッパ的なクリティカルなセンスのある非常に優秀なチベット人でした。サムテン・カルメイとはチベット語の会話も含めてボン教のことなどいろいろな意味でよく勉強しました。

上山 ボン教って難しいですねえ、われわれ素人から眺めてみると(笑)。

御牧 いろいろミソロジー(神話学)でおもしろいのがあって、この機会に日本の宗教のミソロジーとの比較の上で、先生にいろいろ教えていただければと思っています。例えば卍(まんじ)というシンボルがありますが、日本のマンジというのは左マンジですよ。あれ、なぜあなるのか。

上山 調べたことないですねえ。

御牧 ボン教は左まんじです。普通、仏教のマンジは右マンジで、ボン教は左マンジだと言われているんですけど。そして2種類あるというのは、とっくの昔にビュルヌフが『法華経』の翻訳をしたときに書いていますが、なぜそうなるのか不思議で。また、インドの仏足跡なんかに、普通は右マンジが書いてあるんですけど、中に左マンジが交ざっているものがあります。一方、日本の仏教とか寺社マークは左マンジになっていますが、何故そうなのか。上山先生に何えは多分一遍に解決するんじゃないかと前から思っていたんですが。

上山 どうも申し訳ありません。ご期待にそえなくて。日本ではチベット語を話す機会はなかったんですか。佐藤先生なんかも話すことは話したわけ？

御牧 日本では機会がありませんでした。佐藤先生

の発音は正確な発音だと思いますけど、話す機会はなかったですね。東洋語学校の方ではチベット語を一からやってやろうと思って、日本で少しやっていたということで最初は1年と2年の授業を同時にとることを許してもらいました。ソルボンヌで学位論文の準備とインド学関係の授業を受け、東洋語学校ではフランス人の2年分を一遍にやりましたもんですから、留学の最初の1年目はもうくたくたに疲れまして、メトロの中でも立ったまま寝られるぐらいでした。東洋語学校の授業はフランス人と同じ試験を全部受けましたので、後で考えますと、チベット語の勉強には勿論なりませんでしたけれど、むしろフランス語の非常に良い勉強になりましたね。

上山 あれは何年ごろでした？この学園紛争の後？

御牧 後です。ちょうどあの少し後です。

上山 向こうは紛争であまり研究条件が変わるといようなことはなかったの？

御牧 そのころは影響はもうなかったですね。紛争の成果はパリ大学に1から13の名前が付いたことだけだ、などと皮肉が言われていましたけれど。

上山 学位論文のテーマはなんでしたかね。

御牧 学位論文はラトナキールティの「刹那滅(せつなめつ)論証」の問題を扱いました。

上山 刹那滅というのは、「俱舎論(クシャロン)」なんかで取り上げたのの展開なんですか。

御牧 そうです。「俱舎論」に出てくる刹那滅論は古刹那滅論とか「滅を根拠にする刹那滅論」とか呼ばれます。つまり、ものは最終的には滅するというのを根拠にして刹那滅を論証しようとするものだからです。それに対してダルマキールティの頃から「存在を根拠にする刹那滅論」というものが出てきます。つまり、「存在するものは刹那滅である」という命題を論理的に論証しようとしたのです。そしてこれを契機に仏教の論理学が非常に発展します。

上山 そのときには、「アトミズム(原子論)」はどうなるの。

御牧 アトム自体の刹那滅は議論されませんので、アトムの実体は認めながらアトムの構成物としての現象は刹那滅だというのがだと思います。

上山 この論理学のダルマキールティとか、その人たちは唯識までは踏み切らないんですか。

御牧 最後には唯識になります。最初は経量部の立場から出発するのですが、議論が発展していくにつれて最後には唯識の立場に移行します。

上山 ああそうか。紙一重ですからね(笑)。

御牧 紙一重ですねえ。ラディカルな表象主義から出

発して最終的には外界の存在を否定すれば唯識になって。彼らは経量瑜伽(ヨガ)総合学派——経量部と唯識の総合学派——と呼ばれて位置づけられるんですね。一番問題は、「帰謬論法(きびゅうろんぼう)」を刹那滅論の中に多用する点です。帰謬論法というのは、インド論理学の中で正統な推論式としての位置はついに持たなかったのですが。

上山 あ、そうですか。

御牧 はい。むしろ誤知と考えられています。仮言命題というのをインド論理学は非常に嫌うためです。

上山 ああ、それでね。

御牧 仮言的な論証方法というものは、補助手段としては認められますけど、正式には認められないというのが正統派の立場だったんです。仏教の論理学、刹那滅論は奇しくもそういう帰謬論法を正統な推論式と認めようというそういう方向に進みました。

上山 じゃあ、やり方としてはカントのアンチノミー(二律背反)なんかに似てきますかね。

御牧 ディレンマのような。ナーガルジュナのディレンマというのはインド論理学の正統派の立場にはどれにも当てはまらなかったんですけれども、彼の弟子たちはそれを帰謬論法に変えようとしたり正式の論法に変えようとしたり努力した。

上山 帰謬論法といって過不足はないんですか、大体そのネーミングは。論理の形としては。

御牧 それで間違いないと思います。

上山 おもしろいですね、そこまでいけば。しかしこれは否定だけしか出てきませんね。

御牧 そうですね。中観学派が使う帰謬論法というのは、相手の論証を誤りに導くときに用いるのでどちらかという否定ですけど、刹那滅論の場合は「存在するものは刹那滅である」ということを論証するために、その命題を換質換位した、「刹那滅でないもの、つまりパーマメントなものは存在しない」という論理的必然関係を論証しようとしています。

上山 ああ、そちらのね。そちらで否定の力が出るわけですね。そういう今のようなテーマ、学位論文で取り上げたようなテーマと、それからチベット学はどこかで結び付いてくる面もあったんですか。

御牧 結局はうまく結び付きましたですねえ。最初はどうなることかと思ってたんですけど。(笑)本当はフランスへ行ってチベット学をやりなさいと言いだされたのは大地原先生でした。

上山 大地原さんはチベット語には馴染んではなかったんですね。

御牧 全然。それが、70年頃フランスへ招聘されて講

義されていた先生が帰って来て、突然、フランスへ行ってチベット学をやりなさいなんて言い出されて。留学するときには随分お世話になりました。最初は本気でやるつもりはなかったんですけど、やってるうちにだんだん嵌ってしまって……。チベットの学問の主流は哲学なんですよ。中国の場合は歴史が主流になると思いますが。チベットの僧院の中で行われている勉強というか、学問の体系というのはみな仏教哲学なんですよ。しかもそれは概ねインドの後期の仏教です。古い原始仏教とかというのはもうほとんどチベット訳では残っていませんので……。

上山 部派仏教以後ぐらいですか。

御牧 部派仏教のものもあまりチベット語では残っていません。やはり「般若」「俱舍」「中観」「唯識」……。ヴァスバンドウ、ディグナーガ、ダルマキールティ……。

上山 いわゆる大乘になるんですね。

御牧 大乘仏教の哲学が主流なものですから。そういう訳で自分が従来やっていたこととパリで始めたチベット学とがうまく結びついたのです。チベット語の会話なんかも習いましたけど、そんなものどこで役に立つのかと最初は思っていましたけれど、チベット人にもものを尋ねるときに、よくできる学者というのはチベット語以外しゃべりませんので、あとで役に立ちましたですね。

上山 インドの経典のチベット語訳というのはわりあいによくできてるわけですか。十分にそれで満足できるほど。

御牧 できてると思いますね。もちろん間違いもありますが、リテラルに訳してあるという点では優れてると思います。もちろんサンスクリットの写本が出るに越したことはないと思いますが、それがなければ、漢訳よりはやはりサンスクリットにずっと近いと思いますね。

上山 ああそうですか。日本の場合、二重に欠点があるというか、漢訳でまずチベット訳より劣ってるとしたら、その次に日本語訳はないですよ(笑)。

御牧 そうですね。日本語の「大蔵経(だいぞうきょう)」というのは……

上山 ないわけですね。まあ今ちょっと少しずつ長尾先生なんかがね。

御牧 「中央公論」の大乘仏典のシリーズは上山先生のイニシアティブですね。

上山 いやいや(笑)。

御牧 チベット学についてもいつかプロジェクトとして重要なものを15ほど選んで訳で出せばよいのです

けどね。

上山 あなたのツォンカバはあの中に入ってますけどね。「大乘仏典」の中に。あれ一つだけですよ（笑）。

御牧 一つだけですね。あのシリーズは、もとは論書はあまり入れないというのが方針だったんですか。インドのシリーズの中で論書は2巻だけですよ。世親と龍樹と。

上山 ええ、一応ね。さしあたり経典でいこうというスタートでした。だから日本の場合、チベットと比べたら、仏教研究の上では相当マイナスを背負い込んでいるわけですね。漢訳というフィルターを一通通して。しかもその漢訳を日本風に返り点で読むとかということで、日本語になっていないわけですね。

御牧 ただ、漢訳もマイナス面ばかりではなくて、スピリットを写したというか、お経なんかはむしろ漢訳で読むほうが流暢に読めますね。サンスクリットやチベット語はもう繰り返しが多くて、ちょっとうんざりするようなところがあります。漢訳ももちろん繰り返しが多いんですけども、割と許容できるというか……。

上山 訳経僧といいますが、義浄だとかは意識的に変えていますね。インドのやつは繰り返しが多いので、我々は簡略化するというふうに意識的に……。中国の趣味には合わんということを書いていますね。

御牧 はっきり書いてますか。なるほどね。そういうふうに肯定してるわけですね。

上山 意識的にやったんでしょうね。

御牧 なるほど。それから玄奘なんかの翻訳で危険なのは、彼は非常に博識でしたので、自分で付け加えることがあるんですね。翻訳しながら知ってる知識をひけらかすというか。ついこう付け加えたり。

上山 そういうのもだれかが論証してくれるといいんですがね。「成唯識論」なんてのはそういう疑いがあるんじゃないですか。

御牧 あると思いますね。「大毘婆沙論」などもそうですね。もともとあったとはどうも思えないのを彼が付け加えたという痕跡が大分あるので、注意して読まないで非常に危険です。

●ツォンカバ

上山 チベットのことはほとんど知らなかったんですけども、かなり早く長尾先生があれをやっておられたということは知ってて『西藏仏教研究』を買ってあったんですが、眺めもしなかったんだけど、今度のあ

なたのツォンカバの読みやすい日本語で訳しておられるのを覗いてから長尾さんのを見たら、ひどく苦心惨憺して、文章なんかもなかなかエレガントな文章で、頑張っておられたんだなあということがやっとわかったんです。

御牧 長尾先生はやっぱり偉いですね。あの時期にあれに着目して翻訳されたというのは偉いですね。

上山 あそこでは「中観（ちゅうがん）」というのが中心になっているんでしょうけれども、ただ、それが一つの修行の方法論にまでいってるわけですね。普通、中論とかなんかだけを問題にする場合にはなかなかそういう修行の方法というところまで届かないんですけどね。あそこでは、例えばよく天台宗に関して、「止観（しかん）」といいますが、「止」と「観」というものの方法論がわりと立ち入ってというか、繰り返しというか、展開してきていると。ああいうふうに中観そのものが修行の一つの方法論として定着していくというか。あれは、そういうことがまずあった上でかなり時間がたってから。ツォンカバは15世紀ですか14世紀ですか。

御牧 15世紀です。

上山 15世紀ですね。チベット仏教といえば密教だと普通思っているわけですが、そういうのがああいう中観を中心にしたような思想とどうかわっていくのかということは、割と調べられてるんですか。

御牧 難しいですね、『秘密道次第大論』を大乘仏典の中で現代語訳してみようと思いましたけれど……。ツォンカバを信奉するゲルク派は『秘密集会（しゅうえ）タントラ』というタントラを重視します。

上山 それはどこで成立したんですか。

御牧 よくわかりませんが、現在のヴィハール、ベンガル、オリッサなどの東インドの地方だと考えられています。時代についても諸説ありますがだいたい8世紀頃に成立したと考えられています。サンスクリットも残っており、漢訳やチベット訳も存在します。そのタントラを解釈する立場にいろいろあって、その一つがナーガールジュナという人の立場です。この立場を、ナーガールジュナに「聖ナーガールジュナ」というように聖者のタイトルがついているので「聖者流」と言います。ただ、このナーガールジュナは例の中観のナーガールジュナでなくて、密教のナーガールジュナという……。

上山 あれが同じなのか違うのかよくわからないんですけど（笑）。寺本先生が昔、あれを、2人のナーガールジュナとかを取り上げたことがあったけども。やっぱり違うようですか。

御牧 我々は中観のナーガールジュナと密教のナーガールジュナという二人を区別していますね。ナーガールジュナ2世とかナーガールジュナIIとか呼ぶ場合もありますが。

上山 空海は同一視している感じですね。

御牧 そうですか。チベット人も全く同一視してますね。それで彼らにとっては全然違和感がなくて、ナーガールジュナは600年生きたんだと(笑)。

上山 ああそういうことね。それでもいいわけだ(笑)。

御牧 そういうふうに考えているようですね。ただそうすると、先日ある国際学会でアメリカの研究者が言ってきましたが、600年生きたのはいいとして、それじゃなぜ結局死ななければならなかったんだろうって(笑)。

上山 それはわかりにくいですね(笑)。

御牧 「秘密集会タントラ」はツォンカパのゲルク派が重視し、後代のチベット人の分類では「父タントラ」に分類されますが、それに対してサキャ派が重視する「ヘーヴァジュラタントラ」という、やはり後代のチベット人の分類では「母タントラ」に分類されるタントラもあります。

上山 これはいつ頃出てきたんですか。

御牧 ヘーヴァジュラは少し遅く、9世紀半ば以降と考えられています。サンスクリットの原典もチベット語訳も漢訳も存在します。

上山 これ自体は性的なもの。

御牧 かなり露骨な性的表現が出てきます。ただそれを文字通り解釈するのかシンボリックに解釈するのかが見解の分かれるところですね。また、面白いことに、サンスクリットやそれを忠実に翻訳しようとしたチベット語訳では非常に露骨な表現がそのまま残っているのに対して、漢訳は検閲があるのでしょね、その部分は何かわけのわからないような……。

上山 ぐちゃぐちゃになってんの。

御牧 漢字で読んでも意味がわからないような表現になっています。そしてツォンカパの功績は、そういう性瑜伽(せいヨガ)を、普通の者が勝手に何でもかんでもやってもいいというものではないという、戒律の面で肅正といいますか、顕教の立場で中観の帰謬論証派の立場を極めたものについてのみ密教のレベルに進むのが許されるというふうに規定しましたので、僧侶の独身主義は厳粛に守りつつ、従って、密教は戒律と矛盾しないばかりか、密教の中に取り込まれる形になったのです。

上山 戒律が前提条件なんですね。

御牧 そうですね。それで非常に人々の人気を得た。

ゲルク派がはやったのはそういうところにもあるんだと思います。それ以前のタントラの流れで、いかがわしいというか、わけのわからないような動きが大分あったようですが、そういう点をリフォームしたのが彼の一つの大きな功績だったと思いますね。

●ダライラマ

上山 ゲルク派の中からダライラマが出てきて、ダライラマが政治権力をとる時期もありますね。あれがもう江戸時代というか、17世紀に入りますかしら。1600年代ですか。

御牧 そうですね。ダライラマ5世の1642年です。

上山 ではやっぱりこのゲルク派というのがチベットの仏教の中心になるわけですか。政治権力と結びついて。

御牧 そうですね。ダライラマと一番最初に呼ばれるのは実は第3世ダライなんです。モンゴルのアルタン汗が1578年にこの称号を与えたのが最初です。それから諡の形で第2世、第1世が命名され、第1世はゲンドゥンツェプと言っテツォンカパの弟子の一人です。そういう風にツォンカパとも繋がる訳です。

上山 ああそうか、2世、1世をつくったんですか。

御牧 特に、第5世が非常に強大な力を持って、ホシヨットモンゴルの力を得て、1642年に政教一致の強大なダライラマ政権を確立し、チベット全土を掌握します。政治的な権力を持つというのはおもしろいもので当然財力の面でも恵まれることになるのでしょね、書物でもゲルク派のものは校正がよく行き届いていて整備されているようなところがあって、例えばニンマ派のテキストなどには校訂が十分でないようなテキストが多くて好対照になります。

上山 ニンマ派というのは割と神秘主義的なところがあるんですか。密教が有名ですが、それはゲルク派の密教とは大分違うんですか。

御牧 ちょっと違いますね。ゲルク派の依拠するものは新訳タントラですが、ニンマのものは古訳タントラです。ニンマというのは「古い」という意味なんです。古いというのは何が古いかという、10-11世紀のころにリンチェンサンポがいわゆる無上瑜伽タントラを含めて新訳タントラを訳出しますが、それ以前のタントラは古タントラというふうには呼ばれるようになります。それがニンマのいわれです。だから新タントラ派からみれば、古タントラの中には原典なくしていかげんにつくってあるいかがわしい偽経が多く含まれて

いるといわれています。ただニンマ派の中にも優れた学者が多く出ます。特に14世紀の頃にロンチェンラブジャムパという大学者が生まれて、少し前に出るサキヤ派のサキヤバンディタと合わせて、チベット人は「サ・ロン・ツォン」、つまり、サキヤバンディタとロンチェンラブジャムパとツォンカパの3人を代表的な偉大な学者として挙げますね。

上山 何か書いておられましたね。解説に。

御牧 ええ、一番最初に（笑）。ロンチェンパのものなんかもおもしろいですね。もちろんとても全部は読んでいませんですけど、密教ばかりでなく、顕教の部分も教相判釈の一種のドクソグラフィになっていて、インドのものなんかを解説する場合に、有部、経量部、瑜伽行学派、中観学派と、レベルの低いものからだんだんに上って最後に中観学派の最高の教義に至るといって、一種の瞑想の階梯の体系になっているんですね。

上山 それは空海の「十住心」の構想と似てますね。「十住心」の階梯は低い方から、儒教、道教、小乗仏教、大乘仏教といったぐあいになっていて、大乘仏教のなかでは、唯識（法相）、中観（三論）、天台、華嚴、真言の順になっています。頂点の真言が密教で、密教のところでは、あなたのツォンカパの解説かなんかを見ていたら出てきてましたけれども、「大日経」の中の「菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟となす」というのが根本になります。

御牧 有名な三句の法門の偈ですね。

上山 「大日経」のね。やっぱりあの辺が決め手になるわけですよ、最高の立場の。あなたはあれどこで引いてましたかね。

御牧 カマラシーラという人が「修習次第」という書物の中で。

上山 ああ、そうか。カマラシーラというのが大きいんですね。あれはツォンカパより大分早いんですね。

御牧 8世紀のインド人です。ツォンカパはカマラシーラの「修習次第」を非常に重要視して踏んでいます。

●チベット牧象図

上山 「チベット仏教修行の一断面」という論文の中に「牧象図」というのを出していますね。

御牧 前に梶山先生が若いころになさったお仕事があって、非常に立派なお仕事なんですけど、少しよく解らないところもあって、それが類似の図を沢山集めている内によく解らなかつたところが全て解りましたので、きっちりした形にしておこうと思ったのです。

上山 この「牧象図」というのが14、15世紀ですか。チベットで始まるのは。

御牧 絵自体はもっとずっと遅いと思います。

上山 あなたはここに集めたのは新しいって書いてましたですね。

御牧 アイデア自体は、中国の「十牛図」よりはもちろんずっと古いと思います。そして九段階の「止」の段階はずっと古く4～5世紀の頃の「瑜伽師地論」の「声聞地」にも出てきますし、心を象に喩える例は6世紀のブハーヴァヴィヴェカ（清弁）の「中観心論」に出ています。思想的には古いんですけど、絵画としてこういう形で表現されるのは、かなり新しく、むしろ今世紀に近い時期にできるんじゃないかなと思われれます。

上山 カマラシーラやその先生のシャーンタラクシタというんですか、これはやっぱりかなり中観のほうにコミットした方ですか。

御牧 そうです。

上山 それじゃあツォンカパまでずっと中観が軸になるわけですか。

御牧 そうですね。インドでは歴史的には唯識のほうが中観よりは後で出てきますけど、そういう修行の体系の中に取り込まれると、「仏教四大学派」と呼んでますけれど、有部、経量部、唯識、中観と、そういう瞑想のプロセスとなる場合は、中観が大体一番上に置かれる形になりますね。ツォンカパが継承するのはその立場です。密教を別として、顕教のレベルでは少なくともそうです。シャーンタラクシタやカマラシーラは、学派でいえば瑜伽行中観派と呼ばれます。最初はダルマキールティの論理学認識論などの影響を受けて、瑜伽行派の立場で議論を進めるんですけど、レベルが上がると、最終段階では中観学派の立場になります。

上山 これがチベットの仏教では主軸になるわけですか。

御牧 ツォンカパが最終的に重視する立場は同じ中観派でも帰謬論証派のチャンドラキールティの立場なのですが、修行段階なんかの記述はシャーンタラクシタ、カマラシーラの影響を強く受けているということができると思います。

●禅と中観の宗教論争

上山 もう一つ、ちょっとおもしろい話で、カマラシーラが中国の摩訶衍（まかへん・まかえん）という禅

僧と論争しますね。僕は人文にいたところに、藤枝(晃)さんからその話を聞いたことがあってね。敦煌文書の研究班で一緒にやっていた上山大峻という人がかなり深入りしたようですね。どちらが勝ったとか、何回やったとか、やらなかったとかね(笑)。その研究史をあなたがきれいに整理してくださっていますね。チベットでは、あれはチベット側が勝って、摩訶衍が負けたということになっているんですか。

御牧 そうですね。チベットの歴史書では、インド側のカマラシーラが勝って、摩訶衍は花輪をカマラシーラに捧げて敗北を認めてチベットから追放されて、禅宗は以後禁止されたと書いてあるんですね。でも、いろいろつじつまが合わないというか、不思議な点があって、例えばカマラシーラは宗論の直後に屠殺人に暗殺されるんです。カマラシーラの先生のシャータラクシタも、もう少し前ですけど論争の前に馬に蹴られて、非常に不思議な死に方をするんですね。しかも論争に敗北したはずの摩訶衍は、論争の2年後に敦煌に現れて、大徳と呼ばれているんです。敗北して追放されたような人が、いかにチベット本土じゃないとはいえ、大徳と呼ばれるかどうかは疑問です。だからどっちが勝ったかというのは、やっぱりちょっとまだわからない面があると思います。

上山 よくわからないんですが、「止」と「観」という修行の方法の中で、禅のほうは「止」だけというような言い方があるんですか。

御牧 菩薩の修行に「六波羅密」というのがあります。「布施」、「持戒」、「忍辱」、「精進」、「禅定」、それから最後は「般若波密」つまり「知慧の完成」という六段階の修行ですが、カマラシーラは、そういう段階を追って最後の修行に行くという立場ですが、摩訶衍のほうは、「般若波密」を極端に重視するというか、最終段階のそれさえわかればいいんだという立場で、頓門派と呼ばれています。結局あの論争というのは、実際に王様の前で2人が対論したようなドラマチックなものではなくて、筆記で継続的に行われた続けられ「チベットの宗論」とでも呼ばれるようなものであったという現実的な結論になっています。

上山 ストーリーとしては王様の前でやったという例の作り話のほうがおもしろいですね。

御牧 作り話のほうはるかにドラマチックでおもしろい(笑)。

上山 これとは大分違うけど、織田信長の前で「安土の宗論」というのがあるんです。16世紀ぐらいかな。辻(善之助)先生の『日本仏教史』かなんかでも採り上げてるし、いろんな人が採り上げていますが、浄土

と法華だったかな。それで軍配は浄土のほうに上がったんですよ。ところが、信長は、浄土の勝ったほうの坊さんを非常にとり立てて、大雲院というところの開祖になるのですが、いろんな資料を見たら、本当は論の中身としては法華のほうの方が勝ってたのではないかという説が割と強い。話としては浄土の側が勝ったということになっているんです。なんかやらせて結局勝たせてしまったのではないかというわけね。権力者の前の宗論というのは、こんなものかも知れませんね(笑)。

中国の禅というのはどちらかというとなんか頓悟風な感じがドミナントになるように思いますね。チベットのほうは中観とか唯識とかを踏まえた、階段を追ったインド風の修行体系というか、ツォンカバなんかの非常に論理的なものを踏まえたもの、そういうのを好むような方向があったのかな。その違いがああ議論にはよく出ている。どっちが勝ったかというのとはともかくとして、チベット人はあちらを選んでしまったと。価値体系としてね。

御牧 先ほどのニンマの中でも、九段階の修行の階梯を述べたようなものがあるって、一番最後の段階は「ゾクチェン(大究竟)」と呼ばれるのですが、「人間の本来の心というものは、本来解脱している心性である」というような言い方をしますので、それが批判されるときは、中国の摩訶衍の思想と同じものでそんなものはだめだというような批判の仕方がされますね。

上山 それはおもしろいですね。今おっしゃった、頓悟禅とニンマとは一緒にしたらぐあいが悪いけれども、似たような頓悟風なところがあるかもしれない。「如来蔵」的なというか、人間というのはもともと仏さんなんだ。ただそれが少し曇らされてるだけで、それをぬぐえば仏さんが出てくる。真言密教の空海の思想が全くそれですね。

御牧 「如来蔵」ですか。

上山 完全にそうです。もともと仏さんなんだが、いろんなもので曇らされている。それを払いのけさえすれば本物が出てくる。のける手段として「三密」という「身口意」の行をやるわけですね。

御牧 チベットにはジョナン派という派がありまして、「他空説」という説を主張します。中観学派の空の思想というのは「自空説」というんです。ものはそのみずからの本性としては空であって実体がないという言い方をするんですが、ジョナン派の空の思想というのは、このものはほかのものの点では空である、という言い方をします。例えば、唯識の三性(さんしょう)説に「円成実性(えんじょうじつしょう)」と「遍計所執性(へんげしよじゅうしょう)」と「依他起性(え

たきしょう)」というのがありますね。普通の世界というのは依他起性で、他によるあり方です。その依他起性を執着を持ってみているのが遍計所執性ですね。その執着をのければ、それがそのまま転換して円成実性という悟りの世界になる。円成実性というのは、他のものの点では空だと。遍計所執性という点では空だという、そういう言い方なんです。

上山 ジョナン派というのは時期はいつごろですか？だれかかなり突出した人がいるんですか。

御牧 教義の大成者は13, 4世紀頃のトゥルブパ・シェーラブギャルツェンという人ですが、有名な人では「インド仏教史」を書いたターラナータという人が16, 7世紀頃にいます。中観、唯識というインド大乘仏教の哲学思想の内では、チベットでは主流は中観だといえると思いますが、唯識的な流れがこのジョナン派的な流れとして残るのではないかと思います。また、他空説に根ざした如来蔵思想を打ち出すために、つまり、如来蔵は実在するが、他なる外来的な偶発的な煩惱の点では空であるという他空説ですが、これはゲルク派の自空説の正統派からは異端として排撃されるんです。そして例えばダライラマ5世は、ちょうど中国でいう焚書坑儒（ふんしょこうじゅ）のような弾圧政策を行って、ジョナン派のものを全部焼いてしまうんです。それでジョナン派のものはチベットには原則として残ってないんです。近隣のブータンなどに残っていたものをようやく最近我々が目にするできるようになったのです。

上山 ずっとお話を伺ったり、あなたの書かれた論文を見ていると、チベットというところは非常に論理的なもの実践とを緊密に結び合わせているというようなどころがありますね。どうしてまたそのように論理性の貫徹というか、そういうことがチベットの文化の中に起こったのかという感じがしますね。

御牧 チベットの僧院では、修行をする課程で若いころから問答形式のいわゆるディベイトを常に行って思想内容を切磋琢磨して吟味する訓練をしていて、日常の問答自体が推論式の形になっているようなところがあります。

上山 日本でも昔、中世というか室町時代とかは論議というのを盛んにやっていたようですね。

御牧 最後は形骸化するんでしょうが、最初は実際やったんでしょうね。

上山 いっぱい論議の記録が残っています。日本ではあまり仏教の中のそういう論理性というものは発達しなかったんですかね。チベットでは今でもそういう…。

御牧 チベットの現状はちょっと把握できていませんが、インドに亡命したチベット人なんか、マイソールとか南インドで、チベットにもとあったような同じような名前のお寺を建てて修行生活をやっていますが、そこでもやはり同じ論理的な訓練が継承されてます。上山 フランスでチベットの学者というか、仏教者とおつき合いになった感じとして、論理性というのはいわゆる現代的な意味での論理性というものと大体似たような共通点を持っているんですか。

御牧 現代に生かせるかということですか。

上山 議論するときに。やっぱり伝統的なものとしてそういうものを受け継いでいるという感じが強いんですか。

御牧 難しいですね。(笑)

上山 例えばアメリカなんかは論理が好きですね。あれはやっぱりいろんな文化を異にする人があややと寄ると、論理というものが頼りだと思ふんです。だから大学などでも非常にトレーニングがしっかりできてるけど、日本はなかなか論理というのが哲学科の中でも根づかないですね。一時はやりかけたことはありましたが、すぐしなびてしまった感じですがね。

御牧 大体、私達が受けてきた教育というのは、どちらかといえば暗記的なものでしたよね。私だけの印象かもしれませんが、何かを提示されて論理的に考えとかいう訓練があまりなかったように思いますね。受験時代の悪い弊害なのかもしれません。大学に入って専門になって仏教のものなんかをやりだしてからようやくこういろいろ考えるようになりましたね。少し遅すぎますが……。(笑)

●ボン教

御牧 最近チベットの土着の宗教といわれているボン教のものを少しはっきりさせるべきことがあって調べています。

上山 あれ、よくわからないですねえ、ボン教というものは。

御牧 「敦煌文書」なんかに出てくるボン教などは、死んだ人と生きてる者の間のミーディアム（媒介）のような役割を演じていたようです。犠牲獣に羊とかヤクとか馬とかを使って、七つの峠を越えて死んだ人の魂を黄泉（よみ）の国まで連れていかせる。死んだ人は黄泉の国へ着くとそこではもう二度と死ぬことがなく、死んだ人がもう死なないというのは変かも知れませんが、一生平安の生活を送ることが出来る。そして

残された者達は安心する。そういう死んだ人と生きて
いる人の間のミーディアムのシャーマンみたいな役割
をしていたようですが、11世紀のころから仏教の教義
を取り込んで理論武装しまして、『敦煌文書』なんか
のは古ボン教というとしたら、これを仮に新ボン教と
呼びますけれども、その新ボン教を仏教のセクトだ
という研究者までいるぐらいで、非常に似たような
ところがあります。

ところが実際に吟味しますと、枠組みはたしかに
仏教から借りているようなんですが、中身には多くの
土着の要素を保持しているようです。特にミソロジー
の面などでは顕著です。ですから、最近それをちょっ
と、どこまでが仏教の影響なのか、どこまでが土着
の要素なのかという点を見極めたいと思ってやって
いるんです。

また、最近ではボン教の『大蔵経』というのが出
てきて、仏教の『大蔵経』に相当するくらいの量
があります。例の「古典学の再構築」のプロジェクト
のお陰で文学部にもようやく設置することが出来
ました。

上山 いつごろできたの？

御牧 古いものから新しいものまで寄せ集めを
したようなところがあってまだ全体像はよく解り
ません。まだカタログをつくっている段階です。

上山 中国の道教のほうでも『道蔵（どうぞう）』
というのがあるでしょ。道教の『大蔵経』みたい
な膨大なものが。もちろん仏教にならってやった
んでしょうが。福永（光司）さんはどこで始めた
のかな。東大のときにはずっとのめり込んでまし
たね、『道蔵』に。ボン教の『大蔵経』は何部
ぐらいあるんですか。

御牧 カンギユルだけで178巻あります。テン
ギユルはもっと数が多いです。いくつか版があ
るのですが、だいたい300巻くらいです。

上山 それはちゃんとした文章になっているん
ですか。

御牧 ちゃんとした文章です。ただ、楷書体
ではなくて草書体で書かれているものだから、
なかなか普通の人には馴染みにくくて、研究も
あまり進んでないのです。そこで、少なくとも
ある程度ははっきりするまで調べてみようと思
っているところです。ところで、話は少し変わ
りますが、先程ミソロジーの話が出ましたけ
れど、例えばナーガ、龍というのがいますが、
あれは日本なんかだと神様なんじゃないかと
思いませんか。

上山 神様ですね。

御牧 竜神さん。

上山 室生寺の鎮守さんというか、ペアにな
ってるお宮さんのご本尊は善如龍王（ぜんにょ
りゅうおう）ということになっています。『延喜
式（えんぎしき）』に

書いてあるから相当古いですね。

御牧 最初からもう神様として入ってくるん
ですか。

上山 神様ですね、あそこでは。

御牧 インド仏教では、六道輪廻（ろくどうり
んね）の考え方でいえば、畜生つまり動物と考
えられています。しかも生まれ方は、いわゆる四
生の中では忽然と生まれる化生（けしゅう）と
いう生まれ方をすることになっています。『俱
舎論』にそう書いてありますね。例えば地獄に
生まれる人なんかはみな化生なんです。それと
同じように、龍も化生なんですけれど動物で
す。それがボン教のミソロジーでは、アスラ
のカテゴリーに分類されています。アスラとい
うのはボン教の中では八百万（やおよろず）の
神みな、太陽や月や星やなんやかやエビデミ
ーの類に至るまで、みなアスラに分類されて
います。

上山 アスラですか。

御牧 ええ。阿修羅。

上山 真言密教なんかではそれは天（てん）に
なりますね。それはおもしろいね、両方つき
合わせてみたら。曼陀羅の中にいっぱい、龍
だとかが出てきますけど。あれはみな守護
神みたいなもの。

御牧 最後には神格化するんでしょうね。世
俗的な神格に。

上山 今の例えば室生寺とペアになってる
龍穴神社は、わかりませんね。もともとの
ものか。かなり仏教が入り込んでる感じが
しますね。

御牧 金比羅さんもあれ、神様になります
ね。

上山 ああそうか。

御牧 もとは、クンビーラ、鰐ですね。

上山 だから今のボン教までいくと、日本
のそういうわけのわかりにくいもの、いわ
ゆる両部神道とかいわれているものを調
べていくいいきっかけになるかもしれ
ないですね。

御牧 これはもう少し調べないと確かなこ
とは言えませんが、龍の中には餓鬼（が
き）に分類されている龍もいるよう
です。

上山 それは『俱舎論』なんかですか。

御牧 仏典をチベット語に翻訳するとき
にできた『翻訳名義大集』の中に、龍王
と普通の龍とが区別してあって、龍王は
どうも動物と考えられていて、残りの下
級の龍は餓鬼と考えられているよう
です。ボン教のミソロジーの中でもア
スラに分類されている龍とやはり餓鬼
に分類されている龍とがいるよう
です。ほかにもキンナラ（緊那羅）と
かいろいろおもしろいものがあり
ます。

上山 カルラ、キンナラのキンナラですか。

御牧 そうです。仏教の中ではキンナラも動物と考えられています。キンナラというのは言葉の意味は「これは本当に人だろうか」という意味で、人の姿はしているけれども人ではないようなものを指していますが、『翻訳名義大集』と同じ頃に出来た『二巻本訳語釈』の中では動物に分類されています。ところが、ボン教のミソロジーではキンナラは「人」のカテゴリーに分類されています。人の中でジェラシーを持ったり、他人の悪口を言うのはみなキンナラだといわれています。シッペーコロロといわれる仏教の「生死輪廻図」に相当するものがボン教にもあります。その図の中で人のカテゴリーの中に蛇の頭を持ったり牛の頭を持ったりしたものが描いてありますが、それがキンナラです。

上山 それはヒンズー教から入ったようなものではないんですか。

御牧 ちょっとそれはわかりませんね。たしかにアスラの問題なんかもインド全般やイランのほうももっと調べないといけないですが、大体仏教では、本来アスラというのは認めなかったですね。六道ではなくて五道なんです。仏教の正統のものにはアスラはいないんです。アスラという言葉すらない。『俱舎論』の中にアスラという言葉は一度も出ないんです。

上山 あれは西から来たんですか。

御牧 イランでは神様ですね。インドへ入ってアスラは逆に悪魔的なものとなり、スラが神様となりますね。仏教の中では後ほど六道になってアスラとして取り込まれますけれども。

上山 いまチベットではボン教と仏教は仲よくしているんですか。

御牧 仲よくしているみたいです。現在のダライはインド亡命中ですが、それがボン教にも非常に理解を示して、ある学会の折などには一緒に座って協賛したことがあったようです。

上山 日本の場合、明治維新でもって両部神道がえらく破壊されたから、いま伝わってないですよ。純粋神道みたいな構えになってしまっただけで。かなり由緒のある神社でも、一時は神官が内務省の官僚になったわけでしょう。だから非常にあそこで歪曲されている。ボン教の場合はそういう目には遭ってないんですか。

御牧 あります。仏教が最初にチベットに入ってくる時にはボン教徒が反撃したり、歴史の中では仏教と対立しています。シャーンタラクシタが一番最初にチベットへ入ってきたときに疫病がはやるんですが、そのときにボン教徒が、これはシャーンタラクシタのせいだといって騒いで、そのためにシャーンタラクシタ

は追い返される羽目になります。二度目に入ってきたときにはパドマサンプハヴァという呪術の達人を連れてきて、ボン教徒を鎮圧して、そしてチベットへ入ることができました。ボン教徒も優勢になったり排撃されたりしますが、チソンデツェン王の時の785年に結局ボン教が禁止になって、その時点で古いボン教というのは一応滅んだと考えられています。その後、1017年に新しいボン教の『ゾウブク』という、ちょうど『俱舎論』にあたるようなものが発見されます。

上山 いつごろできたの。

御牧 それが『埋蔵経典』といいまして、もともと古いんだけど1017年に発見されたという形をとっています。そしてその年代を新しいボン教が始まった年代として考えています。『ゾウブク』の中には世界の出来方とか範疇論の考え方とか『俱舎論』と似たようなことが書かれています。『俱舎論』をもじってつくったようなものかもしれません。

上山 おもしろいですね。ヒンズーの影響も受けるんでしょうか。

御牧 それはあると思います。昔考えられたボン教の3段階というのに、一番最初は「啓示のボン」という段階があって、その次に「逸脱のボン」という段階があって、シバ派の影響を受けて逸脱したものが「逸脱のボン」という段階だと説明されています。そして最後に「変化したボン」という段階が置かれているのですが、ただ、この3段階説というのは、仏教の人が叙述している段階なので、ボン教徒自体はその3段階説というのを全然認めていません。

上山 民博でやったのはどういうテーマだったかしら。ボン教をおやりになった……。

御牧 あれは14世紀のボン教文献の中に書かれているコスモロジー（宇宙論）の問題を扱ったものです。仏教だったら『俱舎論』なんかに出てくる、この世界の一番下に虚空があって、それから風の曼陀羅、それから水の曼陀羅、金の曼陀羅となって、それから地獄、餓鬼、畜生とつながって、須弥山があって、それから色界の天に行って、無色界になってという……、あれと同じようなコスモロジーをボン教も持っています。枠組みは仏教とほとんど同じ、ちょっと用語を変えているだけです。ただ、中身にいろんな土着の八百万の神などが入っているものですから、どれぐらい似ているかと思って比べてみようと思ったんです。しかし、ボン教と仏教は常に抗争しているかというところではなく協同しているようなところもあります。例えば、ダライ5世は、国家の一大事を決定するような時に、ラサのゲールク派の大学問寺であるデブン寺の南東に

あるネーチュン寺でゲールク派の守護神ペーハーの祭祀を行ってオラクルに託宣を依頼しますが、このペーハー神はニンマ派の起源ですし、オラクルはボン教起源です。また、パンチェンラマの2世と5世はボン教の家系から出ています。さらに、19世紀にカム地方を中心に起るリメ運動という宗派折衷運動にはニンマ派やカルマ派の仏教徒に加えてボン教も一役買っています。

●今後の展望

上山 ボン教をやるにしても、仏教のほうのことをしっかりやった人がやるのでないと難しいでしょうね。

御牧 そうでないと無理だと思いますね。どこまでが仏教のものかというのがわかる人がやらないと……。

上山 あなたみたいに論理的なことをやった上で、それからさらに踏み出してボンまで行って見ても泥沼の中に入ってしまう心配はない(笑)。ちゃんとそういう安全装置をつくってからいかんと怖いところですか。

御牧 入りつつあるのかもしれませんが(笑)。それでもやっぱり先生、先ずテキストをちゃんとつくらないとダメですね。

上山 そうそう、それが基本ですからね。

御牧 クリティカルエディションと翻訳から。それを積み重ねないと……

上山 今のは全部文献があり、客観的なよりどころがあるわけだから。それがまだあまり手がつけられてないんですか。ボンについては。

御牧 ほとんど手がつけられてないです。

上山 しかしその辺がちょっとおもしろいね。やっぱり仏教世界の中でのいろんなバラエティーになりますよね。道教にしろ神道にしろとのかかわりというか、仏教との。それは確かにボンなんかでも仏教と長いつき合いで両方が交錯してるでしょうから。やっぱり仏教を知らないとボンがつかめないでしょうね。恐らく。日本でもそうですよね。

修験道なんてややこしいものがあるでしょう。あれなんかそれこそボンに似てるんでしょうね。仏教とまじってわけがわからなくなっていますね。だけどああいうのは人生の問題を考えるとときに頼りにしてきた時代もあるわけだし、今でも修験の世界なんかは割とにぎやかですよ(笑)。

御牧 空海はもと修験道……。ウパーサカ(在家)ですね。

上山 はっきりウパーサカです。30まで。あの人は非常にそういうものに関心があって、手紙などを見てもそういうので修行したという、日光を開いた勝道(しょうどう)という人なんかにもすごく共感の強い文章を書いていますよ。だからあの人は高野山というものを修行の場所として押さえましたよね。それは山岳修験の修行がどうしても要ると思ったんじゃないですか。

ただあの人は、ご存じのとおりわりあいに中国の漢文に強かったから、きっちりと信頼の置けるようなものを幾つか書いていきましたでしょう。論文みたいなものを。それとあの人はどうしても陀羅尼を唱えるのが、サンスクリットでなければまずいと思ったんでしょうね。向こうから梵字の陀羅尼を40巻ぐらい持ってきて、それを必修文献にしていますね。

よく大地原(豊)さんが言ってたけど、江戸時代の慈雲(じうん)なんていう人はわりと梵学(サンスクリット学)に凝ったわけですね。「五明(ごみょう)」の一つとしてああいうものをジャスティファイしていたみたいです。

御牧 声明(しょうみょう)をですか。

上山 ええ、文法学という意味での声明ですね。

御牧 日本語の50音もそこから来るんですか。

上山 本居宣長は、五十音図は明らかに梵学、つまりサンスクリット学のおかげをこうむっているということを書いていますね。それが仮名遣いというもののよりどころになったようですね。仮名遣いを正していくための。大分話がそれてきましたね。そろそろこの辺で止めることにしましょうか。

御牧 まだまだお伺いしたいのですけれど……。